

## I 事業の概要（地域の実情含む）

東日本大震災において、本校では平成22年3月11日に帰宅困難生徒13名が学校に宿泊し、3月12日には格技場に約70名の市民が避難してきた。また平成28年8月に発生した台風10号により多数の生徒が被災したとともに、生徒や職員が居住する久慈市や岩泉町で甚大な被害が生じた。

このような状況をふまえ、災害発生時に自分の身を守ることに加え、地域の一住民として高校生ができる支援について考えさせた。平成28年以降も大雨の際に河川の水位上昇が発生していることから、近隣小中学校や地域住民と協働しながら防災意識を高め、実践的な防災行動をとるための共通理解を図ることを目標としている。

今年度は本校食物系列の生徒が宮古市で開催された「三陸防災復興プロジェクト2019」における「三陸国際ガストロノミー会議2019」に参加し、食によって地域の魅力を広く発信し、復興を目指す取り組みを学習した。環境緑化系列の生徒は「東日本大震災津波伝承館」にて見学研修を実施し、震災当時から現在までの取り組みを学習した。

## II 取組の概要

### 1 地域連携に係る取り組み

地域の防災力の向上を図るため隣接する久慈小学校、久慈中学校に呼びかけ、令和2年2月21日（金）に本校を会場に地域防災推進委員会を開催し、防災復興教育について各校種における取り組みの情報交換と次年度の活動について協議した。

### 2 ガストロノミー会議2019への参加

2019年6月7日（月）に宮古市で開催された「三陸国際ガストロノミー会議2019」に本校食物系列の2年生15名と3年生19名の計34名が参加した。このイベントでは国内または海外で活躍しているシェフより、地域の魅力を発信することの重要性や、三陸という土地が持つ魅力についての講演を聴講した。オープニングトーク「三陸、そして函館国際会議開催に込めた想い」では伊藤勝康氏・深谷宏治氏より、いままでに自身が活動してきた地産地消を中心とした料理の提供と「世界料理学会 in Hakodate」の内容を紹介いただいた。食に携わる職業人やこれから食に関わると思われる学生に地域創造の推進

力に期待しているという趣旨だった。特別講演では「私たちの食料庫である海を守る」という演題でオリヴィエ・ローランジェ氏がフランス語で講演を行い、通訳の方がタイムリーに翻訳した。本人がとても熱く語っている様子が印象的だった。内容は小生産者と知り合い食材と真摯に向き合う姿勢や絶滅危惧種を食材から外し、メニューを展開するというものだった。「ローカル・ガストロノミーの可能性」と題した岩佐十良氏の講演では、「食を通じて地域が元気になる」ために活動している内容だった。「美味しいものを食べるだけが美食学なのではなく、その土地でなぜこの料理か、なぜこの調理方法・食材なのかを考えて、その文化的背景や、風土、暮らしをも学ぶことが重要」というものであった。講演「世界三大漁場三陸、再発見」で後藤友明氏は「海単独ではなく、森があり、川があってこそその水産資源である。海は食の豊かさの源であること、三陸は様々な環境に恵まれた世界三大漁場である」と講演して下さった。こうした現役のシェフ達による熱い講演を拝聴した本校生徒は、三陸の魅力あふれる食材をどのように調理、提供すれば、震災からの復興に貢献できるのかについて深く考えるきっかけとなった。

### 3 東日本大震災津波伝承館（いわてTUNAMIメモリアル）における見学研修

2019年10月9日（水）に陸前高田市に落成した「東日本大震災津波伝承館」において、本校環境緑化系列2年生24名が見学研修を行った。現地では施設職員のガイドによる説明を聞きながらの研修となった（写真1）。

対象生徒は東日本大震災当時小学生であり、事前学習で記憶が曖昧になっていたことが判明したため、当日は各自が質問事項を持ち寄り、案内をして頂いた後でガイドの方に直接尋ねた。

見学研修後の事後学習で内容をまとめ、本校の文化祭である「東高祭」や「学習成果発表会」に訪れた大勢の地元の方々に発信した（写真2および3）。



【 写真1 ガイドから説明を受ける本校生徒 】



【写真2 東高祭における学習展示】



【写真3 学習成果発表会での様子】

### Ⅲ 取組の成果と課題

#### 1 地域連携に係る取り組み

地域連携型指定校としての指定は外れたが、久慈小学校、久慈中学校と継続して連携を行う予定である。高校が事務局のような形で地域防災推進委員会を実施して、今後も互いに負担が少ない形で連携を継続していくことが、連携の質を高めるためにも必要であると考え。特に今年度は10月に上陸した台風19号により、久慈市内でも各地で冠水被害が発生した。人的な被害は小規模だったが、本校生徒でも自宅の床上浸水により避難を強いられたり、久慈駅を境に南北に延びる八戸線と三陸鉄道の線路が破壊されたりしたことで、多くの生徒の通学に影響を及ぼした。こうした背景から地震に限らず災害への備えが重要であるとの認識が本校職員および生徒にも広がっている。本校での避難訓練の取り組みは地震と火災を想定した内容になっているが、現状に即した内容として春季・秋季の訓練では、大雨による浸水と、そこからの保護者連絡や引き渡しを想定した内容を取り入れていくことも必要と考える。

#### 2 ガストロノミー会議2019への参加

今年度より担当者が変わったことで、前年度までの取り組みとは異なるアプローチで復興教育を実践した。食物系列では宮古市で開催された「三陸国際ガストロノミー会議2019」において食に携わる職業人やこれから食に関わろうとしている学生に地域創造の推進力に期待する内容のものや、食を通じて地域が元気になるために活動するという内容の講演を聞き、震災からこれまでマイナスだったものをゼロまで引っ張り上げる復興よりも、そこからプラスに押し上げるためには何ができるのか、どうすれば良いかという復興について学習できた。

参加生徒の全員が学習を通して自分が何をしたいか、出来るのかという点について考える貴重な体験となった。事後学習では今回の見学研修を受けて、普段の自由選択授業で受講している「グリーンライフ」や「食品製造」での栽培・加工といった、自分の所属する食物系列以外の授業内容を振り返り、これから学びたい食物の学習内容に落とし込むことに成功した生徒も見られた(写真4)。

三陸は様々な環境に恵まれた世界三大漁場であり、恵まれた環境であるということを生徒が再認識し、地元の良さ・強みを理解し、食を通じて社会に貢献していく意欲が高まるよう働きかけたい。

三陸国際ガストロノミー会議2019 2019年6月7日(月)



講習会を受けて知ったこと、感じたこと、学んだこと

オーガニックでも、オーガニック・ローランジュさんの講演でも「食資源の減少」による海の危機が言われていることを知り、原因として、地球温暖化、環境汚染、魚の乱獲が影響していることを知り、オーガニック・ローランジュさんが言っていたように、海が枯れても陸にいた私達には分からないとも思いました。今、世界中の海の危機に悩まれていることを知り、料理で何かできるのか、色々な方法の可能性や料理にはあると思いました。海の荒れ、山の荒れを持続的に利用し、余すところなく、使い切り技術がこれから必要になってくると思います。世界的な問題に悩んでいる水産資源の減少と、海の豊かな三陸から、新しいビジョナ新しい木を産出していくべきだと実感しました。これからの三陸の担い手に伝わるように、地域のものに触れ、おいしく料理できるように頑張りたいです。普段の生活から、自然の調和を養った生活をしていきたいです。

【写真4 参加生徒のレポートより】



### 3 東日本大震災津波伝承館（いわてTUNAMIメモリアル）における見学研修

環境緑化系列生徒による東日本大震災津波伝承館の見学研修では、すでに忘れてしまっている部分や、当時の自分が知らなかった他の地域について学習できた。学習の中で「これまで話題に出してはいけないと思っていた東日本大震災ですが、時間が経った今だからこそ当時と今、これからについて考えることが必要だと思います。」という生徒の言葉が示す通り、悲劇の大きさのあまり目を逸らしがちだった部分にも焦点を当てた学習を行うことができた。

本校の環境緑化系列生徒は「三陸ステーションガーデンプロジェクト」における花プランタ作成と久慈駅への設置に参加しており(写真5および6)、これから地域を盛り上げていく行事へ関わったことから復興教育への興味・関心が高く、学習として相乗効果が見られた。学習した内容を掲示物にまとめ(写真7および8)、発表によって発信することで生徒は震災復興を自分のこととして捉えることができた。また、復興事業に貢献できたということで自己肯定感の醸成に成功した。



【 写真5 造園技師指導のもと生徒が本校農場にてプランタを作成している様子 】



【 写真6 三陸ステーションガーデンプロジェクトにて自身が作成したプランタと共に(久慈駅前) 】



【 写真7 事後学習で模造紙に学習内容をまとめる本校生徒の様子 】



【 写真8 事後学習で模造紙に学習内容をまとめる本校生徒の様子 】

### 4 取り組み全体を通して

今年度は本校食物系列と環境緑化系列の生徒を対象として主に見学研修を通した復興教育を行い、各自が学習したり感じたりした内容について発信する場面もあった。しかしながら、この2系列でそれぞれ学習したことをお互いに共有したり、リンクさせたりする段階には至っていない。別の見学研修に参加していても、その根底には震災からの復興という大きな目標があることの再認識のために、今年度の活動のまとめを行う際には2系列における生徒と職員による情報交換の場を設け、全校生徒と地域の防災意識を高める活動へとつなげたい。

これまでの取り組みで災害や復興に対する生徒達の興味関心を引き出すことには成功したが、そこから自分たちに何が出来るのかという点についてはこれからの働きかけが重要である。地域防災推進委員会で小中学校や地域担当者と協議しながら進めていきたい。